



Title	中村本『夜寝覚物語』における幸福的結末の論理 : 第二予言の表現と「結構」としての明石御方物語
Author(s)	中井, 賢一
Citation	詞林. 2003, 33, p. 14-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中村本『夜寢覺物語』における幸福的結末の論理

―第二予言の表現と「結構」としての明石御方物語―

中井 賢一

はじめに

周知の通り、中村本『夜寢覺物語』は、巻一冒頭の「空晴れ、月明らかなる折、あざやかなることを見るを、実夢と申して、これは疾く遅き事こそあれ、必ずむなしからずとぞ、」(三一九頁)¹という叙述と、巻五大尾「殿、上、栄え樂しみ給ふさま、昔も例少なくぞありける。かやうに夢は空しからぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ。」(五五七頁)という叙述とが呼応しており、「夢の効験譚」ともいふべき一貫した枠組みの中に、原作の物語世界が改変されつつ取り込まれている。テクストと云える。河添房江氏は「夢により構造的変化を遂げた作品²」と中村本を定位され、天人予言の夢の機能に注目された。物語の主題展開に機能的連関を果たす仕組みとして「構造」を指定するならば、源氏物語の例を持ち出すまでもなく、その「構造」は幾種にも及び且つ幾重にも構えられている可能性がある。氏の主旨は、「夢」が物語の最も大きな

外枠を規定する仕組みとしてある、ということであり、本稿においては、それを、種々の「構造」を大きく包括し結びあける枠組みという意味において「結構」と呼ぶことにする。ただ、女君(寢覺の中君を本稿では以下「女君」と記す)の宿世を言い当てるはずの天人予言の夢を、そのように中村本の大きな枠組み、「結構」として位置付けるとき、特に物語後半において、それほど重い機能を担っているはずの天人予言が逆夢であったかのごとき印象があるのも否めない。琵琶の秘曲伝授に関わる第一予言は、石山姫君蒙着後の十五夜の演奏によって「音楽伝承譚」よろしく果たされていると見なすことができるのであるが、「あはれ、あたら人の、物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」(三三二頁)という第二予言については、「殿、上、栄え樂しみ給ふ」という、いわゆる幸福的結末とは相容れないように思われはしないか。第一予言に力点がおかれ第二予言は相対化される、といった類の解釈もここに起因すると思われ、この夢の位相について見極めること、そして、その「夢の効験譚」という「結構」の機能につ

いて定位することが急務であると思われる。果たして第二予言は「相対化」され「逆夢」に終わるのか。あるいは「逆夢」という捉え方こそが誤読なのか。誤読であるとすれば、なぜそのような表現がなされているのか。

また、中村本にも、原作本同様、源氏物語に依拠したと思われる設定や表現、いわゆる「源氏物語」取り（本稿ではこれより後「源氏取り」と称す）が随所に見受けられる。倉田実氏は「その（源氏物語の）影響下に成立した作品は、引用とずらしを方法化することで固有性を確保していた」と述べられ、原作本寝覚は無論、鎌倉時代成立の改作本までも射程に収めた、源氏物語以降作品における、「方法」としての「源氏取り」の一般化を説かれたが、そうあってみれば、尚更、原作と結末が異なる中村本については、その論理について注意されねばなるまい。中村本における「源氏取り」の「方法」は、その結末の改変にまで影響を及ぼすものとして機能するのであるか。あるいは全く別の論理に基づいて原作とは異なった結末に向かうのであろうか。

中村本の「結構」と幸福的結末の論理、および中村本というテクストの性格について、以上の観点から考察する。

一 「思ひ乱れ」る女性像への改変

天人降下二年目の、いわゆる天人第二予言を引用しよう。

（中村本）

ふけゆくまゝに、さながらうち臥し給ひたる夢に、同じ人おはして、「教へたてまつりしよりも、すぐれてあはれなりつる琵琶の音かな。この御手ども、聞き知る人、えしもなからんものを」とて、いま五つ教へ給ひて、「あはれ、あたら人の、物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」とて、帰り給ひぬと見て、覚め給ひぬ。

（三三二頁）

（原作本）

例の御殿籠りたるに、ありし同じ人、「教へたてまつりしにも過ぎて、あはれなりつる御琴の音かな。この手どもを聞き知る人は、えしもやなからむ」とて、残りの手いま五つを教へて、「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」とて、帰りぬと見たまふに、この手どもを、覚めて、さらにとどこほらず弾かる。

（四三三―四四頁）

両本の叙述を読み合わせたとき、中村本には「乱れ給ふ」とあり、原作本の「乱したまふ」とは異なっていることが知られる。四段動詞「乱す」から下二段動詞「乱る」への改変は、他動詞から自動詞への改変であり、そしてそれは他者の心を「乱す」文意から自らの心が「乱る」文意への改変を意味する。中村本は、別の場面、入道の心を女君が乱す、という文脈において他動詞「乱す」を用いているし、また、先に

見たとおり、「夢の効験譚」ともいうべき「結構」の根幹に関わる予言の叙述を書き誤まるとも考えにくく、したがって、この場面については中村本の論理に即して「乱る」に使い分けがなされたと推察される。つまり、この天人第二予言は、女君が心を「乱す」ことになる男君（中納言を本稿では以下「男君」と記す）の心のありかたではなく、あくまで心「乱る」当事者女君の「宿世」のありかたをこそ焦点化し、且つ主題化していると読まねばならないだろう。原作本には「ものを思ひ、心を乱したまふ」とあり、女君自身が「ものを思ふことと男君の「心を乱す」ことが並立していたが、中村本においては見たとおり男君サイドの「乱」された心のありかたに全く言及されていないこともその証左となろう。

かように、中村本における天人予言の夢は、「思ひ乱れ」る女君の「宿世」のありかたを焦点化し、それを「夢の効験譚」ともいうべき「結構」の中に位置付けることで主題のありかを顕在化させる機能を持つのであった。横井孝氏は、源氏物語における紫上らの述懐と原作本の女君の述懐とを比較したうえで、原作本寢覚が源氏物語の「女の物語」を取り込み主題化していると指摘されたが、中村本は、既に「結構」という物語の枠組みのレベルにおいて、女の「宿世」のありかた、「女の物語」という主題性に焦点を絞り込んでいるテクストなのである。ただし、本稿はこの「女の物語」に関わった主題の定位を目的とするわけではない。その主題を語るための

中村本の枠組み、「結構」のありかたを明らかにすることこそ目的はある。この視点から、再び天人第二予言の表現を読み比べたとき、いささか不自然な点に気づきはしないか。中村本が、なぜ「物を思ひ乱れ給ふ」という叙述になっているのか、逆に言うなら、なぜ「物を思ひ給ふ」ではなかったのか、という点である。前に見たとおり、原作本には「ものを思ひ、心を乱したまふ」とあり、前者が女君自身の心の問題、後者が男君の心に影響する問題、と分別されるのであった。もし、中村本が女君の心のありかたの抽象だけを目的としているのであったならば、男君の心と関わった原作本の「心を乱し」の部分のみ切り捨てても十分その意を尽くせたのではないか。物語の枠組みを指定するべき予言の夢の言辞が、「物を思ひ給ふ」でなく「物を思ひ乱れ給ふ」であることの意味に思いを致さねばならないだろう。そのためにも、先立って中村本の方法としての「源氏取り」について概観しておかねばならない。

二 「夢の効験譚」と

「住吉靈験譚」としての明石御方物語

原作本寢覚の物語世界は永井和子氏によって「源氏物語宇治十帖の色彩をついだ『あはれなる』世界」と定位された。その後、寢覚の女君に浮舟との類似性や宇治大君との類縁性¹¹

を看取する指摘がなされ、原作改作問わず、寢覺の女君が生かされる物語世界が、いわば「宇治十帖」取りによつて紡がれている、という見方は一般化していると言つて良い。瀕死の病床で男君と相逢う場面、あるいは原作では欠巻部の、男君と左大将との板挟みの恋に苦しむ場面などは、その設定においても、あるいは表現においても、確かに宇治大君や浮舟の苦悩するありかたを想起させ、女の宿世のあやにくさを主題化する機能を果たす「宇治十帖」取りと言える。その意味において、それぞれの場面に即した「宇治十帖」取りは中村本の物語「構造」としてあるということになる。注意すべきは、女君が複数の源氏物語の女性のイメージをひとりで吸収する重層的人物造型がなされていることで、いわば様々なタイプの苦悩を一手に引き受ける悲劇の女性像として形象化されていると言えよう。女君の悲劇性を炙り出す営為として宇治大君と浮舟のありかたを同時に寢覺の女君に付着させることは功を奏していると言える。本稿の趣旨とはやや逸れるが、中村本で大君と中君（女君）とが異母姉妹に改変されていることもこの点から了解できるように思う。受容者の視点で捉えるとき、女君に宇治大君のイメージが付着するのは男君の垣間見の際に箏の琴を弾いていることから理解されるとして、その同一人物に浮舟の属性を看取するとすれば、この女君が姉からみて同母妹でないことは最低限の条件であつたろう。同母であればどうしても宇治中君のイメージが勝つ

てしまう。それでは宇治の姉妹の楽器を取り替えた原作本と同趣向に終わる。つまり、中村本は、原作本から離脱すると同時に、女君に宇治大君と浮舟をより明確な形で重ねて見せるために宇治中君の属性をひとつ切り捨てたということになるのか。戻ろう。私が注意したいのは、寢覺の女君が宇治大君あるいは浮舟のいずれか一人のありかたに終始していない事実なのである。一人の人物像に固定されないこの女君の造型は、逆に言えば際限なく様々な人物像を付着しうる流動性を孕んでいるとも考えられる。「宇治十帖」世界において決して幸福であつたとは言い難い宇治大君と浮舟のありかたと、幸福的結末を迎える中村本の女君のありかたとを比べ合わせたとき、宇治大君や浮舟とは別の人物のありかたが女君に付与されるがゆえに女君は「宇治十帖」世界から離脱し得た、と想像することもあながち的外れとは言えまい。

中村本においては「宇治十帖」以外の「源氏取り」を思わせる場面も多く見られる。例えば、女君に求婚する左大将の「鬚黒らかにて、御歳も長け給ひたれば……」（四三頁）という属性は、玉鬘への求婚に関わつて「年卅二三のほど」（藤袴巻一〇一頁）で「色黒く鬚がちに見えて、いと心月なし」（行幸巻六〇頁）と評される鬚黒右大将を、その官職とも相俟つて容易に想起させようし、また、東宮が石山姫君を寵愛する様子「さるまゝには、明くるより暮る、までおはしまし、ある折は、やがて御殿籠り明かす折もある」（五五五頁）は、桐壺帝

が桐壺更衣を溺愛する様子「あるときには大殿籠り過してやがてさぶらはせたまひなど」(桐壺巻五頁)とあるのを想起させる。いずれも設定、表現とも似通った趣向と言つて良いだろう。つまり、中村本は決して「宇治十帖」世界のみに依拠した「源氏取り」を行つてゐるのではなく、源氏物語正編世界をはじめから摂取し、種々の場面「構造」として取り込んでゐるのであつた。そうあつてみれば、中村本の「夢の効験譚」としての幸福的結末が源氏物語正編世界から抽象されている可能性は十分に考えられる。

中村本大尾、「殿、上、栄え樂しみ給ふ」と評される直前の女君の歌は「うれしと思ひ知らでややみなまし憂きに絶えたる命なりせば」(五五七頁)であつた。もし憂きに絶えてしまつた命であつたならば今の嬉しさを思い知ることゝなかつただろう、という趣旨のこの歌は、現世において「栄え樂しむ」ことを喜びとすると同時に、来世への望みを恬淡に否定するものでもある。もし憂さに命絶えても来世にそれ以上の喜びを期待する、などという来世信仰の姿勢は微塵も見られず、極めて現世利益的な思考と言わざるを得ない。この現世利益的な「夢の効験」が、天人という超常的な力に裏打ちされて達成されるあたり、天女「かぐや姫」と重ねて把握する向きもあるようであるが、与しない。女君が自らの妻(大君)の妹であると知つた男君は、女君の正体が分からない時のほうが、かえつて、もしその正体を知つたならどのような苛烈

な場所へでも訪ねる、という強い情熱を支えに出来たのに、と悩むのであるが、その苛烈な場所の例として原作本では「蓬萊の山」(九八頁)が挙げられるのに對して、中村本では「虎臥す野辺、蓬が島、千尋の底」(三四一頁)と改変されている。言うまでもなく、女のために「蓬萊の山」に分け入るといふのは「竹取物語」のくらもちの皇子のエピソードを彷彿とさせる。中村本は原作とは異なつて、注意深く女君に「かぐや姫」の影が添わないよう氣を配つてゐると見たい。ともかく、源氏物語正編において、述べたような現世利益的な「効験」が何か超常的な力の関与によつてもたらされる例と言え、まず明石御方(本稿では以下「明石御方」と記す)の「住吉靈驗譚」が思い起こされるのではないか。明石御方は、須磨明石退去時の光源氏と結ばれ、明石姫君を出産し、その明石姫君が入内、立后することで権力の中枢へと押し上げられ、一族とも繁栄へと導かれる。「父君(明石入道、)ところせく思ひかしづきて、年に二度、住吉に詣でさせけり。」(須磨巻四〇〇四一頁)とあつたとおり、父入道の指示ではあつたものの、年に一度は欠かさず住吉詣でを行つて願を掛けていたからこそ明石姫君入内後の「年ごろよろづに嘆き沈み、さまざまくき身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、晴れぐしきにつけて、誠に住吉の神もをろかならず思ひ知らる」(藤裏巻一九一頁)という明石御方の述懐が成るのであり、明石御方にとつてはまさに「住吉靈驗譚」として位置付けられてい

ると言える。須磨巻の時点で明石御方が具体的に明石姫君の顛末まで想定しているはずはなく、その「願」はおそらく父入道の意向どおり自らの将来に掛けられたものと思われ、当然その成就是明石御方その人の利益としてであり、明石御方もそれを住吉の「靈験」と見なしているわけである。のみならず、今、明石御方は「思ひ屈しつる命も延べまほし」と考えている。明石姫君入内にかかる「晴れぐしさ」がその喜びに拍車をかけるがゆえに、更に命を延ばしたいとまで現世に拘泥するのであり、明石御方の味わっている幸福があくまで現世において有意の性格のものであることが表明されていると言えよう。こういった、当該人物にまず帰納する現世利益的な幸福の享受、という点において、女君と明石御方とは類似した人物像としてあると言えるのではないか。このように考えたとき、そして中村本における「夢の効験譚」という「結構」を「住吉靈験譚」に重ね合わせるとき、それぞれの超常的力学の関与する世界を生かされるふたりの女性像には様々な共通点があることに気づくのである。以下に特徴的な五点を挙げてみよう。

(i) 箏の才能に琵琶の才能が神秘的に付加される

明石御方は光源氏に明石入道から「入道が」物の切にいぶせきおりくは、(箏の琴を)掻き鳴らし侍りしを、あやしうまねぶもの(明石御方)の侍こそ、自然にかの兄大王の御手に通ひて侍れ」(明石巻六六頁)と紹介されることで物語の表舞

台に登場する。この明石御方の才能は箏の琴にとどまらず、続く入道の「びわなむ、まことの音を弾きしづむるひと、いにしへも難う侍りしを、(明石御方は) おさく」とこぼることとなり、なつかしき手など筋ことになん。いかでたどるにか侍らん」(明石巻六七頁)の言によって、琵琶の才能も披露される。入道が「いかでたどるにか侍らん」と、教えてもないのに修得していることを不思議がっている点、特に注目したい。

中村本の女君は、「父源氏太政大臣は」姉姫君には琵琶を教へ、おと、は宮腹の御むすめ、それには箏の琴教へ給ひつ、……(三三〇頁)と箏の琴の技芸を設定された上で、その才能に天人が感応し琵琶の秘曲を授けられることになり、その演奏は父に「琵琶をば、未だ教へきこえざりつるを、誰が教へたてまつりて、これ程めづらしき手をば、弾き給ふにか」(三二二頁)と言わせるものであった。琵琶の教授なき修得を父が不思議がるという趣向は源氏物語と軌を一にする。

第一の才能が箏の琴、それに付加される第二の才能が琵琶、それも決して父が教え込んだものでなく不思議な熟達の仕方をする神秘性を有すること、これらの点に注意したい。

(ii) 箏の才能に男君が惹かれる

明石御方への興味が高まった光源氏は「この此の波のをとに、【かの物の音を聞かばや。さらすは、かひなくこそ】」(明石巻七五頁)と言う。「かの物の音」を琵琶の音と解釈するこ

ともこの場面だけからは可能であろうが、後に明石御方と逢う際に「この聞きならしたる琴をさへや」（明石巻七頁）と言っていて、光源氏が明石入道から噂として「聞きならし」ていたのは筆の才芸についてであつたことが分かり、したがつてまずそこに光源氏の興味が向いたと考えるのが自然であらう。

中村本においては、男君の視点に即した叙述で「琵琶の音も悪しからねど、時々掻き合はせらるゝ、筆の琴はすぐれてありがたく聞こふる。」（三三五頁）とあり、女君の筆の琴に男君が興味をもつたこと、明らかである。

女君と男君とを結び付けるものが筆の才能であつたこと、しかも、いずれも琵琶の才能も備わっているうえで琵琶ではなく筆であつたこと、など注意したい。

（Ⅲ）姫君の誕生が繁栄をもたらす

光源氏と明石御方には明石姫君が、寢覚の男君と女君には石山の姫君が誕生する。両姫君とも十一歳になる年の四月に入内し、それぞれの一族の繁栄に立ち働くキーパーソンとなる。なお、両姫君とも裳着の腰結は中宮が務めるのであるが、光源氏が「中宮の腰結は」後の世のためしにやと、心せばく忍び思たまふる」（梅枝巻一五九頁）と述べているとおり、中宮の腰結というのは「後の世のためし」と見なされるほど極めてまれな例であつたことが知られる。そうであつてみれば、この共通性には注目すべきであらう。

（Ⅳ）「子持ち」と称される

明石姫君出産後の明石御方の様子は「子持ちの君も、月ごろ物をのみ思ひしづみて、いとよはれる心ちに、……」（落標巻一〇四頁）と語られる。明石御方が「子持ち」と呼ばれるのはこの場面だけである。源氏物語全編を通じて、他に二例「子持ちの御方」という用例が、薫出産直後の女三宮と若宮出産直後の宇治中君に、いずれも産養の叙述において見られるが、いうまでもなく姫君の母を「子持ち」と呼んでいるのは明石御方の例のみであり、その意味で明石御方の属性を規定する特異な叙述と見られよう。

中村本においては、小姫君（石山姫君の妹）出産後の女君の様子が「子持ちの、なごり苦しく弱げにて臥し給へる」（五四三頁）と記される。中村本においても女君を「子持ち」と称するのはこの場面のみであり、ここにも両者の類似が見て取れる。

ただ、なぜ寢覚の女君が石山姫君出産直後に「子持ち」と呼ばれていないのか、疑問に思われるところではある。先に見た源氏物語の三例は、いずれも産養の時期であるから、出産直後、あるいは極めてそれに近い状態の母について使用される語であることが分かる。しかし、寢覚の女君は、その時期、自失状態のまま石山姫君と引き離されているのであり、石山姫君の母という属性からは極めて遠い位相にあつた。この時期、母としての位相にない者を「子持ち」とは呼び得な

かつたということなのではないか。あるいは、物語の論理として、女君をまだ「母」としてでなく「女」として生かさねばならなかった、ということかもしれない。「子持ち」の語が小姫君出産時に転用されるのは、もはや女君の「母」の位相こそが強調されるべき展開に物語が至っているからであろう。例を挙げよう。左大将（この時閑白）の大君が男君と結婚することになった際、もし女君の位相が男君を恋慕う「女」に傾斜していたのなら、さすがに辛いはずであろう。にもかかわらず女君は「げに扱もあらば、そのゆかりにむつび寄りで、あひ見がたき姫君を見ることがありなんかし。」（四八五頁）と、まず石山姫君と会う機会と捉えている。「母」としての感情が優先されている。少なくともこのあたりでは、女君は「母」の位相を肥大化させた人物像として描かれていると言える。しかし、石山姫君出産時点では、まだこのような境地に至ることを許されず、「女」でなければならなかった、ということになるうか。

（Ⅴ）姫君を「小松」と呼ぶ

石山姫君の成長ぶりを女君に見せたいと思う男君は「見せばやな小塩の山の姫小松神さびゆかん千代のけしきを」（三六六頁）という歌を贈り、女君も「例ならず目とどめたま」（三六七頁）。原作本ではこの歌は「よそへつつあはれとも見よ見るままににほひにまさるなでしこの花」（一九三頁）であり、この「なでしこの花」から「姫小松」という改変につい

て石壁敬子氏は「新しさをねらったのであろうが、——中略——『例ならず目とどめたまふ』の微妙な心理は単純なものになってしまっている」と評され、場面の情趣を減じた改悪と見ていられるのであるが果たしてそうであろうか。

明石御方の明石姫君との子別れの場面で光源氏が詠んだのは「生ひそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代もならべん」（薄雲巻三二頁）という歌であった。「武隈の松」が光源氏と明石御方の喩であり、したがって「小松」が明石姫君の喩となまっていること、明白である。歌中に用いられる「千代」という語彙からも、中村本がこの歌を前提としていると考えるのは妥当であろう。中村本、源氏物語とも、女君と関わった男君の目によって姫君が「小松」と称されている。思えば、初音巻において明石御方に明石姫君から直筆の手紙が来る場面¹⁵で、その手紙を明石御方は「小松の御返り」と呼んでいた（初音巻三八三頁）。源氏物語では明石御方の視点から「小松」と言われ、明石姫君に付着する語として定位されていると言えよう。源氏物語全編を通して「小松」の用例は七例で、うち一例は「小松原」、植物の松を直接指すものが二例。人物の喩として用いられるのは五例で、前に挙げた明石姫君を指す二例を除くと三例ということになる。この三例の内訳は、ひとつが夕霧雲居雁夫妻で、残る二例が玉鬘の子供たちである。ひとつの姫君を単独で「小松」と呼ぶ例は明石姫君以外に見られない。中村本にある「姫小松」というのも

「小松」がひとりの「姫」としてあることを定位する語り口である。源氏物語における「小松」が明石姫君を特に指し示す語彙として位置付けられることは疑いなく、よって石山姫君と明石姫君とは重ね合わされることになり、必然的にその母女君と明石御方とも重ね合わされているということになるう。

以上、五つの観点から女君と明石御方との類似性について見てきた。ここに挙げた他にも、父が入道すること、父の思入れが極めて強くその父の意向に縛られること、「さいはひ人」と呼称される場面があること、等、瑣末な点も含めればふたりの類似点は実に多い。中村本が意識的に明石御方の人物像を女君のそれとして吸収し重ね合わせていることは間違いないと言って良からう。

明石御方が光源氏や明石姫君との関係性において現世利益的な繁栄を遂げることが「住吉靈験譚」という構造に保証されるゆえであるならば、中村本においては「夢の効験譚」という構造こそが女君の幸福的結末を保証すると言える。だからこそ中村本は女君に明石御方の人物像を重ねるのであり、それはとりもなおさず中村本の枠組み、「結構」としての「夢の効験譚」そのものが、明石御方における「住吉靈験譚」を取り込んだものであることを意味するのであった。

つまり、中村本の「源氏取り」は、かように明石御方の「住吉靈験譚」を「結構」として摂取し、物語の主題性や場面性

に即して、適宜「宇治十帖」をはじめとする源氏物語の場面「構造」を換骨奪胎しつつ散りばめるという方法に則って成立していると考えられるのである。しかし、このように中村本の「源氏取り」の方法をひとまず定位したところで、疑問が霧消するわけではない。天人第二予言との関わりである。中村本の女君が生かされる「思ひ乱れたまふ宿世」は、やはり幸福的結末を保証する「夢の効験譚」の枠組みに嵌め込まれているのであり、それが「住吉靈験譚」に裏打ちされていたからといってその不自然さが氷解するわけではない。果たして何ゆえ「思ひ乱れたまふ宿世」という表現になっているのであろうか。

三 ふたつの「思ひ乱れ」る女性像と中村本の「結構」

再び天人第二予言の夢を想起しよう。「あはれ、あたらしい、物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」と天人は女君の宿世を告知した。この予言は、前に見た「夢の効験譚」という枠組みによつて実夢であることを保証されねばならないはずである。現に秘曲相伝という第一予言は「音楽伝承譚」の形で実現した。中村本が「夢の効験譚」という「結構」によつて原作本を脱構築したテクストである以上、この第二予言のみが実現しないとはどうあつても考えられない。

繰り返すが、中村本にとつてこの予言の夢は特別な位相に

あるはずであり、よつてその表現は中村本の論理と関わるものであるはずである。中村本の「夢の効験譚」を支え裏打ちする枠組みが「住吉靈験譚」の論理であり、それゆえ女君に明石御方との類似性が付与されているとするなら、女君の「宿世」の枠組みも明石御方のそれと関わっているのではないか。明石御方に付着する語として「思ひ乱る」があつたのではないか。

頻度	8 回	7 回	5 回	3 回	2 回
人物名	浮舟	宇治大君	明石御方 宇治中君	空蟬 臘月夜	紫上 落葉宮 六条御息所

右は源氏物語において、「思ひ乱る」と叙述される女性について、その叙述頻度順に一覧にしたものである。当然ながら物語受容者は数多く「思ひ乱る」と叙されるほどその人物像を「思ひ乱る」女性として定位していく。ゆえに、地の文・会話文を併せた叙述の「頻度」を重視した。見ての通り、最も多く「思ひ乱る」のは浮舟であり、次が宇治大君である。ここに、中村本が多く「宇治十帖」取りをしている論理が透視できるように思われるが、それ以外にも、一覧に名を連ねる女性を思い起こさせる叙述が中村本には散りばめられていることに気づく。例えば、石山姫君出産直前の女君の衣を男君が持ち帰った場面、「形見の衣のなつかしさを、ただあた

りにおはするやうに、慰み給ふ。顔に押し当て、……」(三五七頁)などは、光源氏が空蟬の小桂を持ち帰り「ありつる小桂をさすがに御衣の下に引き入れて……」(かの薄衣は小桂のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴らして見るたまへり)(空蟬巻九三頁)と叙される場面を連想するし、あるいは、左大将との結婚が決まった女君が男君と再会を果たす場面、「女君も、何ばかり積もらぬ齢ながら、世の憂きも辛きも明け暮れ嘆きつ、身を馴らはし給ひければ、あはれなるふし」(も、思ひ知り給はぬにしもあらねば、「こはあるまじきことぞかし。またも憂き名よ」とおぼし乱るれど、ひたぶるにおそろしくなどはあらで、さるべきふしなどは、いらへ給へる……」(三九九頁)と、男女の仲の嘆きを知ること男君への愛情を深め、あつてはならないことと自省しつつも久々に逢う男君の愛を受け入れてしまふ、という心の動きは、久々に光源氏と逢う臘月夜の「年ごろは、さまざまに世中を思知り、来し方をくやし、公私のことに触れつ、数もなくおぼし集めて、いといたく過ぐし給にたれど、昔おぼえたる御対面に、その世もとをからぬ心地して、え心づよくもてなし給はず」(若菜上巻二五三頁)という場面の心の動きとその設定までもが酷似している。前に横井氏の御論考に触れたが、女君の述懐はそのまま若菜下巻の紫上の述懐を連想させるし、女君への恋に心惑う男君に正妻大君が折に触れ皮肉を言うところなど、落葉宮に恋慕する夕霧とそれに嫉妬する雲居

雁の三角關係を目の当たりにするようである。男君と女君の夫婦仲を妬んで出現する左大將の死靈の、遺児の養育を感謝しつつもあたりの昔語りに我が身の辛さを引き比べて羨望する、という訴えの展開なども、男女の相違はあるものの、秋好中宮の後見を感謝しつつも光源氏と紫上の昔語りに触発されて紫上に取り憑こうとする六条御息所の死靈の訴え方を模倣しているようにも思える。これらの女性たちは、浮舟と宇治大君も含めて、状況や程度に差こそあれ、源氏物語において、恋に関わる苦悩の体現者であると言えるように思う。少なくとも、現世において恋の苦悩が幸福的に止揚される宿世を生かされていない女性たちであると言えるだろう。

ところが、そういった女性たちとはやや異なつた「宿世」を生かされる人物も、「思ひ乱る」と頻繁に叙される女性の中に存在するではないか。明石御方と宇治中君である。確かにこの二人も光源氏や匂宮との恋に関わつて苦悩させられてはいる。しかし、前に見た女性たちとの決定的な相違点は、男君との間に子が生まれること、そしてそれが地位の好転の契機となることである。明石姫君の入内に際して明石御方が現世利益的な喜びを噛みしめることについては前に述べたが、宇治中君も、匂宮との間に若宮が生まれ、少なくとも物語上では匂宮と夕霧の六君との間に子がないままである以上、その地位は揺るがないと見ねばなるまい。その意味において、宇治中君も明石御方と類似しているとと言えるのである。

る。ただし、寢覚の女君が宇治中君の宿世のありかたこそを主に背負うとは考えにくいだろう。第一にその子が姫君でなかったこと、第二に何らかの超常的な効験としてその現世利益的幸福が機能していないこと、第三に寢覚の女君の描写が宇治中君のそれと遠いこと、などが挙げられようか。第一第二の理由については例示するまでもあるまい。第三の理由について触れておこう。前に、明石御方と女君の類似を明石姫君と石山姫君の類似から説明したが同様に考えてみる。もし寢覚の女君に宇治中君の人物像が重なりとすると真砂君が中君の若宮に相当することになるが、真砂君の誕生は「玉光るやうなるおのこ子、むまれ給ひぬ」（四三八頁）とあり、むしろ光源氏の誕生場面「世になくきよなる玉のおの子御子さへ生まれ給ひぬ」（桐壺巻五頁）の描写を連想させないか。また、真砂君は七月誕生、若宮は二月誕生であつた。真砂君に若宮の人物像は重ねにくく、したがつて女君と宇治中君の重なりも大きいとは言えないであろう。前に少し触れたが、異母姉妹への系図変更も宇治中君と寢覚の女君とが重なりにくくなる要因と言えよう。

つまり、寢覚の女君が天人第二子言で「思ひ乱る」と叙されたのは、明石御方が「思ひ乱る」の語によって人物像を措定される女性¹⁾だったからではないか。光源氏との恋ゆえ身の程意識に苛まれたつも「住吉靈験譚」に保証される形で明石姫君を通して現世利益的幸福の喜びの直中に身を転じること

ができた、浮舟たちとは異質の、「もうひとつの『思ひ乱る』女性像」として明石御方はあった。

中村本における「源氏取り」は、「住吉靈驗譚」に裏打ちされた「夢の効驗譚」という「結構」の内部に、「宇治十帖」あるいは源氏物語正編の印象的場面を散りばめるという方法によって支えられていた。それは、恋に関わって苦悩の宿世に「思ひ乱る」女性像が、苦悩の果てに現世利益的幸福を掴む「宿世」にある「もうひとつの『思ひ乱る』女性像」の中に、あくまでその苦悩の具象として引用され組み込まれているに過ぎないとも言えるのではない。無論、これら「思ひ乱る」女性以外の「源氏取り」も多くある。女君にこれら以外の女性像が透視できる場面もなくはない。しかし、それらの「源氏取り」は、中村本の枠組み、「結構」としては関与せず、あくまで挿話的に配置されるに過ぎない。中村本の「源氏取り」には、物語構造の視座からは様々なレベルが存在するということになる。かような「源氏取り」の方法こそが中村本の論理を支えていると考えるのである。穿った見方ながら、この方法によって中村本は苦悩の宿世に「思ひ乱る」源氏物語の女性たちの救済を達成しているようにも思えるのであり、あるいはここに中村本の論理が発見されているのではないかとの念もよぎるのではあるが、早計に過ぎようか。

四 中村本というテキストの性格

ここまで見てきたとおり、中村本は、原作本とは全く別の論理に基づいて源氏物語を取り込み、それを物語の枠組みとして利用している。それゆえ、ある意味原作本以上に源氏物語に沈潜したテキストであると言つて良い。しかし、そうあつてみれば中村本の独自性というのはどこにあるのであろうか。源氏物語を解体し女の苦悩の物語を現世利益の「夢の効驗譚」に組み換えたというだけなのだろうか。実は非常に興味深い例があるのである。

・御腰結には、なべてならぬあつ物^{えん}におはしませば、中宮を申させ給ふ。
(四四九頁)

・姫君、中宮の御前に参り給へるを、見たてまつり給ふに、うつくしなどいふはかりなし。いよく母君ゆかしく、思ひやらせ給ふ。御腰結給う事^新たまふ事、例にまかせて、事終はりぬ。
(四五〇頁)

石山姫君の袴着において腰結を中宮が務めていた、という叙述である。前に、石山姫君、明石姫君とも裳着においては同じく中宮が腰結を務めたという共通性を指摘したのであつたが、では明石姫君の袴着では誰が腰結を務めたのか。

「いはけなげなる下つ方もまぎらはさむなど思ふを、めざましとおはさずは引き結ひたまへかし」と聞こえ給ふ。
(松風巻二〇九頁)

光源氏が明石姫君の引き取りを紫上に切り出し、養女とし

ての養育を依頼する場面である。実際の袴着の叙述には腰結役が誰であったか明示されていないが、ここにあるとおり紫上が務めたと考えるのが自然であろう。無論、紫上は光源氏にとって重要な位相にある女性である。しかし、中宮との身分的懸隔は歴然としている。これも前に見たが、裳着における中宮の腰結が「後の世のためし」になるほど特異なことなのであるから、まして袴着なら推して知るべしである。石山姫君は明石姫君を超越する存在性を付与されていることになりはしないか。そして、その母、女君は明石御方を超越する存在性を付与されていることになりはしないか。

あるいは、興味深い叙述は他にもある。物語大団円近く、昔語りをしつつ、男君が女君からの返事の手紙を全て残していると言ひ、女君側も男君からの手紙を全て取り置いていゝる、と応じた場面、そのあと次のように叙される。

源氏の絵合はせは、わが嘆き過ぐし給ひしありさまをこそ描かれけれ、これは、年ごろあはれなりし事どもを、たがへず見給ふ御心の中、いといみじ。(五三五頁)

ふたりのやりとりした手紙は、光源氏の須磨の絵日記に比される。おそらく、「絵をさまぐかき集めて、思ことどもを書きつけ、返こと聞くべきさまにしなし給へり」(明石巻八〇頁)とある、紫上の、都で書き綴った絵日記も含まれていよう。つまり、夫婦間の交流という観点から比較した上で、源氏物語の絵日記では嘆き過ぎた様子が描かれているに過ぎない

が、男君と女君の手紙には長年の様々に心動くあれこれを同じように見つめてきた心の交流が描かれており、その意味でたいそうすばらしい、と評価されていると解釈できよう。これは、源氏物語の相対化などといった程度の把握では済まされないのではないか。これは、源氏物語に描かれた光源氏と紫上との結びつきのありかたを超越するそれとして中村本の男君と女君との恋物語が位置付けられるとの言挙げに他ならないのではないか。

このような叙述から、中村本の独自の位相が見えてくるように思われる。中村本の物語は、源氏物語の達成した栄達のありかた、あるいは恋のありかたを超越する試みなのではないか。改作という営為には多かれ少なかれ原作に対する超克の試みが内在するに違いない。無論、中村本においてもそれは例外ではない。しかし、中村本にとつての原作とは、あくまで源氏物語世界への途上に通過する一つの足掛かりに過ぎず、従つて中村本が超克を試みるのは源氏物語の到達した世界であつたということになる。このように考えてみると、なぜ中村本のテクストが「結構」も、そして具体的場面「構造」や表現についても「源氏取り」するのか、腑に落ちるようになら思われる。源氏物語の達成を源氏物語内部の論理を用いて脱構築し、その上でそれ以上の可能性を提示する。源氏物語に依拠しつつ源氏物語の超克を志す。もし中村本のテクストがそういった試みの所産であつたとするなら、いささか逆説的

ではあるが、これこそが中村本の独自性であり、達成であったと言うことになろう。

おわりに

天人予言の表現と中村本における「源氏取り」の論理について、主として考察してきた。中村本がなぜ幸福的結末に収束するのか、その「結構」と論理、あるいはそこから透視されるテクストの性格が、いささかなりとも明らかになったことと考える。

天人第二予言の夢は決して「逆夢」などではなかった。第一予言と相俟って「夢の効験譚」という枠組み、「結構」を支え、且つその中で生かされる女の「宿世」——「もうひとつの『思ひ乱る』女性像」——こそを照射し、主題に据える機能を果たしているのであった。

中村本の物語世界を「源氏物語」の世界からの離陸¹⁾と捉える視角も呈示されているが、それはあくまで物語の大小幾多の「構造」、設定、表現等、様々なレベルにおいて源氏物語に依拠しつつ、それでいて源氏物語の到達した世界を超越する、という意味においてでなければならない。そして私たちはその意味においてこそ中村本の独自の達成を定位しうるのだと言えよう。

なお、本稿においては女君の心に分け入ってこの物語の主

題性を辿るという段階には至らなかった。女の「宿世」の問題を考える際に、やはりそれは欠くことのできない視角であろう。あるいは、なぜ中村本が神仏靈験譚でなく「夢」をその「結構」と連動させるのか、これも忘れてはならない視点である。時代背景とも関わって考証すべき問題は多い。次なる課題として稿を改めたい。

注

(1) 引用の中村本「夜寝覚物語」本文及び頁数は「鎌倉時代物語集成第六卷」(笠間書院)に拠り、本文の引用に際しては私に表記を改めた。

(2) 石壁敬子氏「改作本『夜の寝覚』を中心に」(『中世王朝物語を学ぶ人のために』世界思想社 平成9年9月)

氏は「原作『寝覚』は、序・跋によつて形成された改作の枠内にはめこまれ、座談の場で話題に上った『実夢』の一例証に過ぎない存在となるのである。原作の世界は、改作の一部分となり相対化されることになった」と説かれる。氏の言われる「実夢」の一例証が、中村本の物語のモチーフであるという意味において「夢の効験譚」と称することにする。

(3) 河添房江氏「中村本寝覚物語」(『体系物語文学史第三卷』有精堂 昭和58年7月)

(4) 乾澄子氏「『夜の寝覚』と改作本『夜寝覚物語』——『憂き』女から『憂きにたへたる』女へ」(『新物語研究2 物語——その転用と再生』有精堂 平成6年10月)

(5) 倉田実氏「『源氏物語』以後の物語文学」(『国文学解釈と鑑賞』

至文堂 平成15年2月)

(6) 引用の原作本文及び頁数は『日本古典文学全集』(小学館)に拠る。なお、底本は五卷本系島原本である。

(7) (入道)「……うつくしくうたき所は、(女君は)人に優れぬべかめりと、うしろやすく思ひしに、心たて、うとましき所のおはしけるこそ心憂けれ。とてもかくても、(女君が)わが心を乱しつくし給ひける人と見果てれば、いとつらくなん思ひなりぬるを、つくぐといひしらせばやと思ふも、さすがに向かひぬれば、(女君の)うつくしさに忘れて、……(四三四四三四五頁)

(8) 横井孝氏「母性論としての寝覚物語」(『円環としての源氏物語』新興社 平成11年5月)

(9) 永井和子氏「寝覚物語の主題とその発展」(『寝覚物語の研究』笠間書院 昭和43年7月)

(10) 池田和臣氏「源氏物語の水脈—浮舟物語と夜の寝覚—」(『国語と国文学』昭和59年11月)

(11) 鈴木紀子氏「夜の寝覚」と『源氏物語』宇治の姉妹—同母姉妹への関心—(『王朝本学の本質と変容散文編』和泉書院 平成13年11月)

(12) 引用の『源氏物語』本文及び頁数は『新日本古典文学大系』(岩波書店)に拠る。

(13) 『源氏物語』において「子持ち」の用例が出現する頁数を示す。柏木巻一二頁 宿木巻九九頁

(14) 前掲(2)に同じ。

(15) 『源氏物語』において「小松」の用例が出現する頁数を示す。

薄雲巻二二頁 初音巻三八〇頁 初音巻三三三頁 藤裏葉巻一九五頁 若菜上巻二三三頁 若菜上巻二二六頁(小松原) 浮舟

巻一九三頁

(16) 藤裏葉巻一九五頁「そのかみの古い木はむべも朽ちぬらむ植ゑし小松も苔生ひにけり」(『老い木』が致仕太政大臣夫妻で「小松」が夕霧雲居雁夫妻)

若菜上巻二三三頁「若菜さす野辺の小松を引きつれてもとの岩根をいのけるけふかな」(『もとの岩根』が光源氏で「小松」が玉鬘の子供たち)

若菜上巻二三三頁「小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき」(『野辺の若菜』が光源氏で「小松」が玉鬘の子供たち)

(17) 明石御方が「思ひ乱る」と叙される場面の頁数を示す。

松風巻一九〇頁 松風巻一九三頁 松風巻二〇四頁 薄雲巻二一六頁 薄雲巻二二七頁

(18) 乾澄子氏「夜の寝覚」—「模倣」と「改作」の間—(『日本文学』平成8年1月)

(なかい・けんいち 本学大学院博士後期課程)